加々美光行「現代中国学の新たなパラダイム：コ・ビヘイビオリズムの提唱」に関するコメント

劉　曉慧
愛知大学国際中国学研究センター研究員

加々美先生の論文は、戦後日本における中国研究機関の創立経緯、研究の文脈を整理し、各時期の研究の特徴とその限界を明らかにした上で、独自の中国研究の方法論を提示された。特に、感心したのは、戦後日本における中国研究の流れに関する論述の部分である。簡単にいえば、戦後中国研究の特徴というのは、国策研究離れという性格から次第に国策研究的な性格を迎えてゆく、そして、新中国、新しい社会制度へのある意味での憧れから、中国社会の厳しい現実を目にした後、批判的な姿勢が主流になってしまったという「親中」から「嫌中」的な、あるいは中国批判という傾向が現れたという。

さらに重要な指摘は、70 年代、特に 80 年から、中国研究を含んだ地域研究における新たな理論的枠組みで、観念世界のオリエンタリズムの歪んだ認識構造を解消しようとするが、現実存在としての世界のオリエンタリズム的存在構造を破壊することには、ほとんど関心を持たない傾向を色濃く持っていた。そのため、ポストモダン、ポスト構造主義全般が持つ非実践的な特徴があったという。このような現象は、中国研究にもあると。このような、理論と現実との乖離、特に経済のグローバリズムという強い嵐が吹く中、思想界でも欧米の自由民主主義的価値観が絶対的な存在となってしまった現在、中国研究を行う際、この流れをどう認識すべきか、そしてどう対処すべきか、という重要な課題について、加々美先生の指摘は、非常に意義があると思う。

理論的枠組の構築には、方法論の研究と設立は、極めて重要である。特に、歴史的原因、イデオロギー的な要因があるため、中国研究に関しては、海外と中国本土との間、方法論研究をめぐるギャップが大きいのではないかと考える。今、中国社会全体は、これまでに類を見ない速度で転換をしている。その中で、中国を世界の中でどう位置づけるべきか、またそれをどのように中国と連動させるべきか、という一連の問題を解決するには、新しい方法論の樹立が不可欠である。研究対象の諸主体と研究者自身の主体の間に、それぞれの目的意識的な態度を相互連動的に働かせようとすることで、研究者と研究対象との間に共同主観性を構築しようとする加々美先生の主張は、理論的には非常に有意義な仮説であり、中国研究、そして中国の学者が求めている目標でもあると思う。

そこで、私の理解では、共同主観性の第一歩として、平等かつ連動できる学術交流の場を作り出すことが重要のではないかと思う。つまり、共同主観性の中身、性格、共同主観性の構築のアプローチ、理論的枠組みなどの問題に関して、できるだけ幅広い交流を通じて、徹底的な議論をしなければならない。一方、方法論として多くの共通性があるが、それぞれの科目になると、如何にそれぞれの専門理論、専門知識と結合させるかは、一定の困難があるのではないかと考える。また、共同主観性を強調しているが、その場合、そもそも共同の客体が存在し得るのかどうかも検証の余地があると思われる。